

[遺族] 児島 菜友香 氏(平成 12 年(当時 16 歳)、兄を交通事故で失う)

[要旨]

## ○当時の状況

2000 年 5 月、当時 18 歳の私の兄は、バイクで学校へ行く途中に自宅近くの曲がり角で運送会社のトラックとの事故に遭い、2 週間後、目を覚ますことなく亡くなりました。

高校 2 年生(当時 16 歳)だった私は、その日は学校が休みで家におり、兄がバイクで出かけるのを寝ぼけながら見ていました。午前中に警察から電話があり、兄が事故に遭い、緊急手術が必要なため親の許可があると聞かされ、あわてて母の職場に電話をかけました。

病院では、兄がたくさんの管につながれ変わり果てた姿で横になっており、ショックを受けました。母は兄のそばを離れず、ひたすら話しかけたり、足や手をさすったりしていました。

その日から私は、学校が終わると病院に通うという毎日を過ごしていました。病院から離れた場所にいる時は、いつ危篤の電話がかかってくるのかと、いつも緊張していました。

## ○母や周りの人との関係

私の家は母子家庭で、事故で兄が亡くなり、母にとっては私だけが遺された子供でした。お葬式では、何人もの方から「お母さんを助けてあげてね」「お母さんを支えてあげてね」と言われ、まずは母を支えなければならないと思い、自分の感情をどこへ持って行ったらよいのか分からなくなりました。母とは兄の話をすることもあまりなく、友人に気持ちを吐き出すこともできず、自分の中で消化する方法も分からなかったもので、自分の感情は見て見ぬふりをするしかありませんでした。

事故の真相究明を目指して署名活動が始まり、母から「友達に署名用紙を送って協力をお願いしてね」と言われ、何年も会っていない小・中学校の友達に手紙を書かなくてはなりません。つらい思いを思い出しながら、嫌だと思っても書かなければならない悔しさで、毎日のように泣きながら手紙を書きました。書いたものの、投函する勇気が出ず、送らずに捨てた手紙もあります。

毎週末の様に最寄駅で署名活動をし、母がスピーカーで涙ながらに現状を訴えるそばで、知らない人々に次々と声をかけねばならず、年頃だった私にとってはいつも気が重く、つらかったです。一度、勇気を出して「行きたくない」と母に伝えたことがあるのですが、ひどく落胆したような、何とも言えない顔をして拒否されました。母としては、兄の潔白のためにこんなこともできないのかという気持ちだったのかもしれませんが、当時の私にとっては、「私には選択肢はないんだ」という感情しか起こりませんでした。

## ○自分の感情との葛藤

兄の交通事故が家のすぐ近くで起こったということもあり、兄が出かける前に、私が何か一言でも声をかけていたら兄は死ぬことはなかった、事故に遭っていたとしても死ぬことはなかったはず、と後悔の気持ち

がずっとあります。

母の希望するような行動ができない時は、私が兄の代わりに死んでいたら良かったのに、と思うことがありました。過去は変えられない、私自身で解決しなければならないことですが、かなりの年月、これらの葛藤と付き合っていました。

## ○2つの転機—大学進学、同じ境遇の人との出会い

事故後、2つの転機がありました。

1つは大学進学です。実家から遠く離れた大学に行ったため、母や交通事故関連の活動から離れることができ、精神的に安定した日々を送れるようになりました。送り出してくれた母への感謝の気持ちと、逃げ出してしまったという後ろめたい気持ちがありました。長期休暇で地元に戻った時は、活動をまとめて手伝うことで罪滅ぼしをしていたような気がします。

また、大学で出会った現在の夫には、全てを打ち明け、話を聞いてもらえたことも大きかったと思います。

もう1つは、赤田さん(葉の会代表)との出会いです。2016年、「交通事故で兄弟姉妹を亡くした子供達の集まりがあるから参加してみない？」と母に声をかけられたのがきっかけでした。同じような境遇の兄弟姉妹達と、同じような感情をリアルで共有することができ、「私だけじゃないんだ」と思えたことが何よりも心強く、その時、事故後初めて、自分の感情をさらけ出し、そして、肯定できた気がします。

その後、毎年参加するごとに、心の中に溜まっていた感情の固まりがどんどん浄化され、自分と向き合うことができるようになりました。

## ○ちょっとした一言があるだけで

事故後は、ちょっとした人の言動に傷つくことがありました。お葬式で「お母さんを助けてあげてね」というつい言ってしまうがちな言葉も、「あなたも大丈夫？無理しないようにね」と一言あれば、少しでも気が楽になったのかもしれないと思います。

また、当時の高校の担任には、兄が亡くなったことは同級生に言わないで欲しい、と亡くなった日に伝えていたのですが、翌日には黒板に書かれていて同級生全員が知っていたと知り、失望したことがありました。学校としては仕方がなかったのかもしれませんが、一言でも先生からフォローがあれば、信頼感を失うことはなかったと思います。

当時の私は、まだまだ人生経験も少ない子供で、視野も狭く、自分と同じような立場の人と関わるきっかけもなく、そういう人が存在するののかも分からない状態でした。そのため、自分の持つ悲しみも、親や周りの人への感情もどうしたら良いのか分からない、そういう感情を持つこと自体おかしいのではないかと感じていました。

## 〇一人ひとり感じ方は違う、兄の妹としての私だけの感情

事故後、子供を亡くした親は絶望的になり、遺された兄弟姉妹に目を向ける余裕はありません。親は、遺された子供達が親と同じ感情を持っていると考えがちだと思います。私の母も同様だったと思います。でも、親との関わりや亡くなった兄弟姉妹との関係は、一人ひとり性格も違いますし、感じ方も人それぞれだと思います。

私自身、悲しむ母の姿や、様々な活動に忙しくしている母の姿を身近で見えていましたが、全く同じ感情というのは持つことはできませんでした。とてつもなく悲しいし、悔しいし、不安だし、何よりも寂しかったです。でも、母との感情とは違い、私という人間の、大切な兄を失ったという、私だけの感情だと思っています。

母と同じ感情を持ってない自分は、母の娘として、兄の妹として、失格なのではないかと事故後長い間悩んでいました。兄弟姉妹を交通事故で亡くした人が実はたくさんいること、様々な感情との付き合い方、親と同じ感情を持ってなくても良いということ、事故後、早い段階で知ることができていたら、少しでも気持ちが楽になったのではないかと思います。

そのような思いを持っている子供もいるという視点を持って、遺された子供達に関わっていただきたいと思います。